

「日本製紙論」によると、防寒紙というのは紙製の衣服の原料で、これを使った衣服は、軽くて大変あたためたかいいものになる。この紙の歴史や特徴については次のように説明されている。

日清戦争の時、軍隊の防寒のために寄贈してから防寒紙として内外に名声を博した。土佐では明治以前に紙子という紙製の衣服があり、儀式用として使っていたが、明治になって使わなくなつた。今日の防寒紙はこれを改良したもので、はるかに強靱で保存に耐えるものになっている。軍人社会で試用してみた結果、四週間くらいは効力を十分に保っている。容積、重量とも軽少で目的を達することは確実だ。

この紙の漉き方については、強靱さを主要な性質とし、保存に耐えるようにしなければならぬ。このために原料は繊維の長い楮を用い、他の紙のように白さを必要としないから漂白はほとんどしない。また、水

気に耐えなければならぬのと、強靱性を増すためにもコンニャクやミヨウバンを混ぜて漉くようにする。このようなことは昔の紙子にはしなかつたことで、改良したものといえる。東京の紙製造業者もこの紙を作つて軍隊に送つたことがあつたらしい。



日清、日露戦争で兵士の衣類に使つた防寒紙
(いの町紙の博物館蔵)

た。このために軍人の信用を失墜した。源太は同書で「戦地の兵を助けたいという心がどこにあるのか、理解に苦しむ」として、業者

のやり方を批判している。この紙は日清(明治二十七年二十八日)・日露(同三十七年三十八日)戦争に出兵する兵のために作られた。日記にもこの時期にのみ記述がある。

た。日記にもこの時期にのみ記述がある。日記にこの紙が初めて登場するのは同二十七(一八九四)年十月末。日清戦争の開戦は同年八月一日なので、これを受けて早速この紙を考案したのではないだろうか。十一月末には「陸軍の防寒紙請負」という記述がある。その後数百枚単位で製造して軍やその関連の組織と思われるところへ納品している。

日清戦争の時、各地から製法の問合せがあるという記述が多くなる。日清戦争の時にこの紙の効果が認められたということだろうか。日露戦争には源太のごく近い親族の青年が二人出征した。源太はこの二人に向けて、しばしば陣中へ手紙を送っている。源太に

また、製造法を問い合わせてくる地方へはどこへでも製造方法を書いた文書を送っていた。県内では、他の地方へ教えることを禁止しようという意見も出たらしい。この時源太は「そんなのは頑なで、おろかな考え方だ」と日記に書いている。現にそのように発言したことだろう。
(京大大学院研修員、京都府在住)